

Title	良寛と寒山詩
Author(s)	長谷, 完治
Citation	語文. 29 P.46-P.54
Issue Date	1971-05-01
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68594
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

良寛と寒山詩

長谷完治

良寛の漢詩に三隱の韻致を認めることは早くからなされてきた。鈴木文台の評言「師可伝者有三、(中略)寒山拾得之詩、懷素高閑之書、師皆兼有之、而加以和歌不墜万葉集之遺響」(『良寛禪師草堂集序』並附言「嘉永二年」)は遍く知られている。大関文仲の「良寛禪師伝」には「禪師為詩高雅幽淡、髣髴寒山」とある。いずれも良寛と親交を結んだ人々の言辭である。その後、先学諸賢により良寛と寒山詩との関係は屢々論ぜられてはきたが、その大半は断片的な記述にとどまっている。燕

雑な論考ながら、ここに両者の関係につき聊か調査した結果を報告し大方の御批判を仰ぐ所以である。

禅画を媒介にして寒山拾得の説話が各地に流布していたことを良寛の「題寒山拾得賛」(66)は物語っているが、『三隱詩集』が良寛愛読書の一つであったことも明白な事実である。良寛の漢詩(注1)

170終日乞食罷 婦来掩蓬扉 炉燒帶葉柴 靜読寒山詩……………
にいう「寒山詩」は、或は宛名不明の書簡文(東野豊治氏編著「良寛全集」三三七頁)中に於て貸借のことが記されている「寒山詩」であるかも知れない。また良寛詩105は寒山詩(注2)一五六の模倣であり、良寛詩279は寒山詩一五六を記憶に従って書いたまでであろう。寒山詩二〇の二句「下有斑白人 喃喃読黄老」は良寛の見事な草体によって書の

芸術に再生されて遺っている(『墨表』第一、六三三頁、九頁)。寒山詩三一三を少し変改した

316 吾家寒山詩 勝於談經卷 書放屏風上 時時讀一篇
等と共に、いずれも寒山詩への良寛の傾倒ぶりを如実に示す好資料である。

ところで『寒山詩』の名は既に『通憲入道藏書目錄』(群書類従・巻第四九五所収)に見え、鎌倉時代以後は五山版となって普及もし(『日本古典文学大系89詩集』、印刷術の飛躍的發展・企業化に伴ない江戸時代初期には更に流行する一方、白隠等による注釈書類まで現われる結果となった。従って寒山詩の普及度から推測すると、良寛の場合は五合庵時代は勿論のこと、前稿(『梅花女子大学文学部紀要』第一、六号所収の拙稿「良寛の漢詩」)で述べた玉島での修行時代、或はそれ以前の大森子陽門下で、更には遡って幼少年期に寒山詩と親しむ機会を得たことが考えられるわけであるが、それがいつであったかという事は定かでない。しかも前稿で述べた如く良寛詩には制作年時不明の作品が多いのである。その為に、良寛詩と寒山詩とが単に類似しているというだけで影響関係を論ずるのは妥当でない。良寛愛読の漢詩集は他にも多くあったからである。従って本稿に於ても、ある場合には良寛詩と寒山詩との類似を指摘する

にとどまることにならう。また寒山詩集の刊本五種^(注5)ほどの、いずれの系統による刊本を良寛が見たかということも現在ではわからない。しかし寒山詩の篇数や配列が五種それぞれに多少相違していても詩の内容そのものは大同小異のように思われるから、本稿では注2に記した如く岩波文庫本に基づきつつ良寛詩との比較検討を進め、必要な場合のみ他本を参考にすることにした。

なお寒山子といえは、森鷗外の「寒山拾得」に描かれたイメージ等とも重なりあって、閻丘胤の「寒山子詩集序」にいう「貧人風狂之士」としての側面のみから、その超俗的な人物を把握しがちであるが、詩集から想定される人物像は必ずしもそのように奇矯なものではない。また寒山・拾得の实在性および詩と説話との先後関係には問題もあり、詩のいくつかにについては後代に附加された可能性が充分に考えられるのであるが、本稿で考察の対象とするのは前記の通り岩波文庫本の寒山詩三一四首であり、そこから帰納される寒山像である。また必要に応じて同書所収の豊干や拾得の詩も参照することにしよう。良寛詩および関係資料の引用は総て前稿に準じて行ない、特に注記しない限り右の「全集」を利用していただく。従って本稿で取り扱う良寛詩は四二四首に限定される^(前稿九一頁)。良寛の詩論としては纏まったものが見当たらないので前稿では諸種の資料を総合してその概略を述べたのであるが、寒山の場合は如何であろうか。それがまた良寛に如何なる影響を与えているのであるか。自詩について語った寒山詩の数は良寛のそれよりも遙かに多い。しかも自画自讃し自詩の独自性に対する強い自負が読みとられる^(一三七・二二三等)。そして自詩の意義を如何なる点に見出しているかという点、

六 踏踏諸貧士 飢寒成至極 閑居好作詩 札札用心力
賤人言孰采 勸君休歎息 題安餠餅上 乞狗也不喫
によれば、「詩経」大序で「風」に施された儒教的解釈と共通するものを寒山は考えていたらしいが、

三三 家有寒山詩 勝汝看經卷 書放屏風上 時時看一編

一 凡説我詩者 心中須護淨 慳貪繼日廉 諷曲登時正

驅遣除惡業 婦依受真性 今日得仏身 急急如律令

を読み、また伽陀・偈頌体の類(一六四等)や全篇経文の如き作品

(二二四等)を考えあわせると、寒山詩はより宗教的な自覚の下に

詠出されていると見做す方が妥当なようである。他の詩で「若能会

我詩 真是如来母」(二八五)といい、拾得詩に「我詩也是詩 有

人喚作偈 詩偈総一般」(三二五)とあるのも参考にならう。これに

対し作詩の手法として「詩経・離騷・十九首」を明示する^{(前稿六九}

良寛の場合は詩人的意識がより強いのではなからうか。後述の如く

作品全体を比較するならば、良寛は詩論に於ても作品に於ても広く

文学というものを意識し標榜しているように思われる。

次に寒山詩は具体的に如何なるものであるのかという点、

三七 有箇王秀才 笑我詩多失 云不識蜂腰 仍不会鶴膝

平側不解賦 凡言取次出 我笑佗作詩 如盲徒詠日

三四 有人笑我詩 我詩合典雅 不煩鄭氏箋 豈用毛公解

不恨会人稀 祇為知音寡 若遣趁宮商 余病莫能罷

勿遇明眼人 即自流天下

つまり詩律に合致せず詩病が目立ち俗語が次々と飛び出してくる。それが寒山詩であり、そういった点が寒山詩に対するよき理解者を得られない理由となる。そして右の詩論に基づいて真理を説く寒山

詩は他人の空疎な詩とは異なり質実（九九・二二七・二六九）なるが故に僧俗の非難するところとなる（一七七・一八二・二〇一・二五四）のであった。尋常の詩偏を以て寒山詩を論ずることができないのである。同様のことが良寛詩に關しても言い得るであろう。ただ

205 可恰好丈夫 閒居好題詩 古風擬漢魏 近体唐作師

斐然其為章 加之以新奇 不写心中物 雖多復何為

等を参照しても明らかにならぬ、良寛の場合はやはり文学史的な立場から明確な反省の上に立つて詩というものを考え、形式を否定し「心中の物」を写そうと努めていることがわかる。その詩論の大略は前稿で述べた通りである。

192 孰謂我詩詩 我詩是非詩 知我詩非詩 始可与言詩

は寒山詩に見られる自詩への強い自信を連想させるし、「伊余出此語 時人皆相嗤」（158）は寒山詩二六九の初二句の口物を意識して用いたものであろう。詩全般についていうならば「日日日日又日日」（308）とか「一回書了又一回」（312）の如く、良寛の方に口語的発想を思わせる詩が多く、口を衝いて出たような無造作な措辞が目立つようである。

寒山詩は、五言律の形を有する古体や古調を帯びた律体等を含みつつ、古体・近体いずれの詩体をも有しているが、五言詩が二八五首で全体の九割以上を占め、七言詩・三言詩はそれぞれ二〇首・六首にすぎない。寒山詩二八五にいう「五言五百篇 七字七十九 三字二十一 都来六百首」が全部残っていたとしても右の比率はほぼ変わらない。豊干詩は五言詩のみ二首、拾得詩は五言詩と七言詩のみで五言詩が圧倒的に多い。三言詩が良寛に見出されぬ事実と共に五

言詩が寒山の場合に多数を占める点が注目される。但しその原因は何か、当時の文学史の流れとの関係はどうなるのか、未だ考察する機会を得ない。「一選嘉名喧宇宙 五言詩句越諸人」（二八六）等から推察すると、科擧の試験に備えて寒山自身も特に五言詩の制作に精励したことが一因となっているように考えられるが、ともかく良寛には七言詩が全詩数の三割余もあり、表現の方法が自由な古体詩に於ては寒山以上に饒舌を思わせる長篇をなし、字句の重複を厭わず所思を纏々述べている例が多く発見される。良寛と寒山とは古体詩の長短の差が甚しいこともさることながら、良寛には一首中に於ける各句の字数が比較的自由に一定しない例がかなりある（31・33・35・42・95・98等）。寒山詩には漢代の民謡に似た詩体らしき例が一首（三二二）見出される程度である。これらは物事にこだわらぬ良寛の性格のあらわれであるといってしまうればそれまでであるが、巧まざる構成のうちに詩情が効果的な表出を遂げている五言六二句三一〇字の「唱導詞」（一）や五言五二句二六〇字の「僧伽」の詩（二）を一読すると、痛切な表現と情熱的な作者の姿勢とに改めて驚かされ、寒山詩より遙かに自由な形式の奥に抒情の質および量の豊富なことを感得するのである。

両者の詩の用語に關しては如何であろうか。前引二六七の詩に「凡言取次出」とあるように寒山詩には当時の俗語がかなり使用されている。良寛詩にも俗語・俗字・方言の見出されることは前稿で述べた。「天堂」「阿爺」「爺嬢」「那（何の意）」「作麼」「可可」「取（助字）」等は両者に共通して用いられる俗語であるが、良寛詩に見られぬ俗語や方言も寒山詩には多い。入矢氏（（注5の））によれば特殊な語法（例、二七三の「能不足」）や珍しい代名詞（例、九二の

「汝己」、他に例を見ない語(例、一八二の「急事」)も寒山詩にある。これに反して良寛の場合は、「師曰、唯以卿所解之詞、述卿所思之事、何不足之有」(文台「良寛禪師集卷一」序並附言「嘉永二年」)という如く、寒山詩にあらわれる俗語よりも平易な語句を多く使用する傾向にある。次に隠士野人の生活の点景として「白雲」「樵客」「三徑」の語を用いたり、思想や教訓を内容とする詩に仏語を使用する点は両者に共通している。仏語の使用例として禅家で愛用された「無事」「箇中意」「天真仏」等が掲げられる。この他に良寛詩の「逐勝游」(16)「旭日・青嶂」(34)、「金羈游俠子」(109)、「棲遲」(355)、「支頤」(359等)、「枉苦辛」(140)、「幾冬春」(262等)、「一場痴」(180等)、「黃鸝衫」(194)、「嫩鸚衫」(402)、「祇這是」(145等)、「法界廓無辺」(121)、「庭際何処在」(276)、「靜說古人詩」(155)、「哀哉徒爾為」(178)等は或は寒山詩中の同一・類似の語句を利用したことが考えられないでもない。良寛の「自從出家後」(259)は寒山詩二五〇①に、「尋思少年日」(194)は九八①に依拠していることは確かである。他に確実な例として「閑居好題詩」(205)と九六⑧、「可恰好丈夫」(205)と五三①、「凡言取次出」(398)と二六七⑥、「瞻雲為四隣」(103)と四④がある。字句に異同はあるが「伊昔經過処」(122)と一七四①、「古仏留教法」(132)と三二七①、「受天堂衆 十為地獄囚」(182)と三二八⑩、「試題胡餅与狗子 狗子也不喫」(238)と九六⑦⑨にも両者の繋がり認めてよいと思う。

用語よりやや範圍を広げ表現手法に目を転じた場合の両者の類似・影響關係は如何であろうか。禅僧がよく用いた「但看箭射空 須臾還墜地」(二三八)の如き譬喩に限らず、寒山詩には何らかの譬喩を以て一篇を構成する作品が少なくない。

三器 昔時可可貧 今朝最貧凍 作事不諧和 触途成怪惚
 行泥屢脚屈 坐社頻腹痛 失却斑猫兒 老風圍飯甑
 の如く部分的な譬喩を含む詩から、一篇が比体となつて三八の如き例まで種々の段階があり、譬喩を含む作品数は良寛詩より遙かに多く、殊に右の一五四の終二句に見られる民謡風の譬喩をはじめ、結びの二句に譬喩を配する手法が寒山詩に顯著である。更に入矢氏が指摘される如く(注5の書)、

三 人生不滿百 常懷千載憂 自身病始可 又為子孫愁
 下視禾根下 上看桑樹頭 秤錘落東海 到底始知休

の最後の二句に見るような風人体の手法が寒山詩に屢々使用されている。地方民謡に特有のこの手法はより低次の読者による理解を容易にし印象を強烈にする利点を有している。事実、寒山にあっては上記の手法は勸戒詩に於て最も効果を發揮しているようである。良寛にも譬喩表現はある。

119 仏是自心作 道亦非有為 報爾能信受 勿傍外頭之

北轡而向越 早晚到着時

や162はその成功している例であろうが、全体としては数の上で寒山詩に及ばず、風人体の如き手法は見当らないのではなからうか。いま一つ寒山詩に於ては説得力をもたせる目的で、特定の人物ではなく徐六(九二)・張翁(52)の如き田夫野人を登場させて叙述を展開する例がある。これも良寛詩と相違する点である。良寛・寒山ともに平明で具象的な表現はとるが、右の点で寒山詩の方がより民間の説教的色彩を帯びているといえるであろう。良寛の場合は、例を掲げて説くよりも、教訓内容を具体的な描写で以て直接的に表現する傾向にある。また良寛の勸戒詩には「我見講經人」(117)、「我見

世間人」(182)、「世有多事人」(395)等ではじまり「勸君……」(216)、「寄語……」(335)、「為報……」(349)、「勿……」(119)、「勉哉……」(1)の如き文型を有する作品がある。これらは唐代の教訓詩や勸善文に常用の形式・用語であって、やはり寒山詩に多く見受けるから、その影響の一つに数えてよいであろう。

疊字詩は「古詩十九首」(其二)に既に現われるが疊字の使用は初六句に限られている。これに比べると寒山詩の二首(三二と一四三)は全篇にわたって連用されているから良寛詩唯一の例

176 肅肅天氣清 哀哀鴻雁飛 草草日西頽 浙浙風吹衣
漫漫玄夜永 浩浩白露滋 我亦從此去 寥寥掩柴扉

は寒山詩三二に興味を惹き起こされての制作と考えてよいのではないか。詩的表現という観点からすれば疊字法はあまり好ましい手法とはいえず、成功作とするにはよほどの力量を要するであろう。良寛・寒山ともにこの形では二、二首詠出しているにすぎないが、表現形態に関連してここに附記しておく。

寒山詩の典故は外典にも広く及び、故事の用い方はかなり自由かつ豊富な様相を呈しており詩の白話化と相反する方向にあることは否定できないが、典故の多くは当代知識人に周知のものである。中でも清貧廉潔の隱士や境涯を意味し象徴する故事がよく引用されている(八・四三・五八等)。そして一首全体が殆んど典故によって成り立っている例(五・一〇〇)等は良寛詩と異なる点であろう。良寛の場合はむしろ仏教史上の人物や説話を題材にして詩が組み立てられている(34・42等)。また典拠を文学的なものに限定すると諸注釈書に指摘がある如く、六朝文学の遺音を帯びた寒山詩がかなり発見される。山居詠懐の作に魏晉詩の風格や陶淵明の遺響を伝える詩

(三・一四二等)、或は南北朝詩・三謝の佳品を思わせる詩(二・一〇三・二三七等)があり、それらが良寛の日常生活を詠じた詩に僅かではあるがそのまま受け継がれている。

前稿では詩題・詩意・傍証資料から良寛詩の制作年代を推定して、帰国前の詩と帰郷後の詩とに大別し、後者を制作動機や制作の場という観点から仮に(一)題詩・賛類、(二)贈答詩、(三)独詠の詩に分類し、また甚だ概括的ではあったが叙述の便宜を考え(三)を更に細分して良寛詩の内容に関する概説を試みたのであるが、その項目を一覧できるように表示すると左の如くなる。

甲 寛政年間に帰国するまでの詩

(玉島での作品・諸国遍歴中や帰郷途次の作を含む)

乙 帰郷後に詠まれた詩

(一) 題詩・賛の類

(二) 贈答の詩

(三) 独詠的な性格の詩

(A) 日常生活に関連のある詩

(1) 草庵幽居の叙景や詠懐の詩

(2) 托鉢に関する作品群

(3) 児童との遊戯を題材とする詩

(4) 農村の光景や農民生活に取材した詩

(5) その他(日常生活の種々相を描いた作品)

(B) 思想や教訓的内容を含む詩

(1) 仏教の教理を説いた説理詩

(2) 世人を勸戒する勸世詩

(C) その他の、少し趣を異にする詩

(D)生き方に関して述べた詩

ところで寒山詩には厳密な意味での人物の賛や事物の題詩・画賛は見当らない。また三隱相互の交渉や高僧訪問に言及した詩が若干あるが明確な贈答詩はない。拾得の詩句「寒山自寒山 拾得自拾得 凡愚豈見知 豊干却相識」(二三二)がその一端を示す如く、世人の理解を得られず凡愚との接触を断ち切って孤高の境涯にあったのが晩年の寒山であるようだ。たまに親友の死を歎く詩(四八)はあっても例外というべく、良寛の如き友情表現の文学、或は詩情溢れるばかりの風流風雅の文学作品は皆無である。これは、日常生活を取り扱った前掲(Ⅱ)(A)の(2)(3)(5)と共に良寛文学の一特色であって、寒山詩とは画然と区別されるべき点である。良寛の文学の世界がより広く、より詩的で、より人間味のあるように感じられる所以でもある。従って良寛と寒山詩との関係で特に問題となるのは前掲乙(Ⅲ)の(A)の(1)と(B)(C)(D)であろう。以下、この四項目に限って両者の関係を略述しておきたい。

まず(A)の(1)草庵幽居の叙景や詠懐を含む良寛詩に寒山詩の模倣と思われる作がある。

115 青山前与後	白雲西又東	縦有経過客	消息応難通
83 索索五合庵	室如懸磬然	戶外杉千株	壁上偈數篇
釜中时有塵	甑裡更無烟	唯有東村哭	頻叩月下門
287 独臥草庵裡	夢去翻山野	魂帰遊城闕
.....

は、それぞれ寒山詩の二三七⑥、一七〇④、四三①⑤⑥に学んだのである。「結宇碧巖下」(27)および「家住深林裏」(123)と一六①、「旭日上青嶂」(314)と二二六⑤、「采蕨供昏晨」(167)と七七

⑧、「持籃采木耳」(169)と二七四③、「盤陀石上坐」(359)と二四七①についても同じことがいえる。最後の「盤陀」は禪僧の詩偈によく見受ける句であるが、寒山・拾得詩にも四例ほどあるから一応ここに掲げておいた。しかし両者の詩には自から風格の相違が見られるのであって、寒山の場合は幽居の風致を述べ悠々自適の境界を叙し至道を詠歌するに際しても、人の世から断絶した寒山孤寂の境を描き迷凡を嗟嘆する——少なくともそういう姿勢なり口吻なりを感じるのである。同様の傾向が良寛詩にないでもないが、それは寒山詩の模倣によるものか、寒山詩に影響され、或はそれを意識して作られた詩に限定されるようで、山中の自然景観あるいは隠淪自得の趣や閑寂の幽致を叙述する良寛詩に於ては総じて塵界を超え孤高の境に生きようとする姿勢は前面に強く押し出されていないというべきであろう。

184 秋夜夜正長 輕寒侵我齒 已近耳順歲 誰憐幽独身

雨歇滴漸細 虫啼声愈頻 覺言不能寢 側枕到清晨

の如く孤棲の身を襲う寂寥感を率直に表出するところが寒山と大いに異なる点である。

次に(B)の(1)思想を含む詩に関して比較する。寒山詩中の思想の雑多性については先学の指摘される通りである。寒山には儒仏道三教およびそれらが土俗の信仰と結びついた觀念や隱逸思想等が混在している点で良寛詩と好対照をなす。仏説を提示し仏教への帰依を勧める点は両者ともに変らぬが、「吾師」として宗祖道元の他に釈迦如来・達磨・慧可等の仏教史上の人物を明示する良寛に対して、寒山は単に仏陀如来のみを「我師」(二七八)として掲げる点も注目される。しかし共通点もないではない。この一心こそ真仏である、

真如を自己の中に内在的に発見せよ、外在するものと考へ追求しても無意味である——そういった内容を前掲の良寛詩119や「明珠唯在吾方寸」(32)、48の詩等は説いているのであろうが、同じ趣旨が

一三 説食終不飽 説衣不免寒 飽喫須是飯 著衣方免寒

不解審思量 祇道求仏難 廻心即是仏 莫向外頭看

や九四、「明珠元在我心頭」(二九六)をはじめ良寛詩より大きな比率で寒山詩に於て述べられている。既に断つておいた如く、これは寒山詩の影響というよりも両者の共通点であつて、良寛の法系から考へても当然であり、前稿で言及したように六祖慧能の系統をひく南宗禪的色彩を強く帯びているわけである。高遠な禅理や迷悟・真妄について説く詩は両者ともに観念的で理窟っぽい表現に陥りがちであるが、世間無常・因果応報・六道輪廻等を説く場合は世態人情の実相を提示し具体的に直叙するか、または既述の如き譬喩を以て通俗的に説明している。

(B)の(2)教訓を内容とする作品には対宗教的な詩・対社会的な詩があり、良寛と寒山詩の間の表現手法上の類似・影響関係については上述した通りである。仏教界の腐敗や職業的似非僧侶の墮落を痛烈に批判すると共に、民間説教者の口調で人生無常や因果応報を説き財欲・殺生を戒め日常生活の倫理を説く点、また平明な勸世の詩が存する点では両者は変らぬが、示衆の為の現実的な教誡・忠告や処世術について述べた詩は寒山の方に目立つのではなからうか。寒山詩二二八や一七一、それに

一四 教汝教般事 思量知我賢 極貧忍壳屋 纔富須買田

空腹不得走 枕頭須莫眠 此言期衆見 挂在日頭辺

等がその適例である。寒山の教訓詩の模倣を思わせる良寛詩を一、

二例指摘しておこう。

411 繁榮信家女 言笑一何工 遲日相喚呼 翺翔緑水東

高歌激人心 顧歩街好容 歲暮何所持 搔首立凄風

は美しきもの、好きもの」の儂さ・無常を詠じて歌い収めた寒山詩

一四 璨璨盧家女 旧来名莫愁 貪乘摘花馬 乘撈采蓮舟

膝坐緑熊席 身披青鳳裘 哀傷百年内 不免婦山丘

に刺激された作品ではなからうか。同様に103は一六六の趣意と五五④に拠ったのであろうし、119は一四・四一・四九・五九・六〇・六一・二七九のイメージや語句と重なりあう。200は二〇四に、146は一三三に影響されていると思う。

(C)その他の良寛詩に艶語を用いた纖巧靡弱な情詩と称すべき作品群がある(前稿八五頁)。それらは婦女の痴態を描いて浮気女を論し、美少年・貴公子の豪遊にことよせて青春の欲情に溺れることを戒め世間の浮薄・淫靡の風俗を諷し、以て教訓に代えているというふうな解釈されかねない一面があるけれど、古楽府をはじめ六朝時代の詩に男女邂逅の飲楽や夫婦別離の憂愁等を写す詩が存在するのであつて、寒山も『文選』を通してそのような艶体の詩を学んでいる。従つて148五月清江裡 揺曳木蘭船 素手弄紅蕖 相映転新鮮 岸上遊冶人 馳馬翠楊傍 目擊尚未語 特地正斷腸 は寒山の

一四 相喚採芙蓉 可憐清江裏 游戲不覺暮 屢見狂風起

浪捧鴛鴦兒 波搖鸚鵡子 此時居舟楫 浩蕩情無已

等を念頭においての面白半分の模倣作と考えた方がよいのではなからうか。103と412とは六朝の綺靡を思わせる寒山詩五九に興味をそそられての作品であらう。127と五九、416と五一にもそれぞれ一脈通ず

るものがある。178③④は二三⑤⑥が心にあっての措辞と思われる。215・136・357に対しては特定の作品を掲げ得ないが、やはり六朝の婉麗な余習を有する寒山詩と無関係ではあるまい。なお(C)類中で琴を題材にした詩若干首(161・224等)は如何なる意図の下に如何なる意味を寓して詠じたのか理解できないと前稿には記しておいたが、伯牙・鐘子期の故事を引く寒山詩(二八四等)を考えあわすと、良寛自身に知音なしとの嘆きを寓したのかも知れない。

最後に(D)良寛の生き方に関して述べた詩を寒山詩との関連に於て瞥見しておきたい。前稿で述べたように良寛は、「清逸の地にあって僧俗のいずれにも属さず無欲恬淡無一物の自由な身で、寛やかではあるが己が信ずる道に勉めて倦まず屹々と、しかも無為無作のうちにあるがままの環境に順応しつつあらしめらるるままに誠実に生きよう」と努め願ったのであった。このような信念は良寛の多年にわたる心の遍歴と摸索の果に自から獲得されたのであろう。しかしそれを秀露させる詩句が『三隱詩集』にもいくつかある。「生涯何所似飄彼水上離」(260)、「生涯何所似 汎彼不繫舟」(129)、「隨縁須自恰」(141)、「任運消日子」(80)、「生涯傾立身」(185)、「未厭林下貧」(202)、「清風明月似有縁」(75)、「騰騰任天真」(185)——人生は浮草の如く、また中流に漂う船の如く定めなきものである以上、天地の変改に身を任せ何ら私情を加えることなく、あらしめらるるままに生きるより他に道がないと悟つてみれば、自己の内なる一真実を本然のままに生きることこそ大切なのであって徒らに身を外界に処する必要はない、林下の貧に甘んじて明月清風を友とし騰々兀々と一生を終えるまでだ——そのように右の良寛の詩句は主張しているが、類似の詩句を寒山詩に見出すことは容易い。例えば「人世

若浮萍」(二三三)、「任運還同不繫舟」(二九〇)、「隨縁須自恰」(二〇〇)、「任運避林泉」…………… 天地任更改」(一六〇)、「一生懶懶作」(三二六)、「不如林下貧」(二六八)、「明月清風是我家」(二九五)、「騰騰且安樂 悠悠自清閑」(二四八)等がある。良寛の「元非山林士」(20)は或は寒山詩二六〇の初二句を学んだと考えられるが、このような例を除けば、右に掲げた「任運」「隨縁」「明月清風」等は寒山詩に限らず当時の禅僧が愛用した言葉であるから、詩句の類似のみを以て生き方に関する良寛の信念への影響であると断定することはできない。それならばどのように解すればよいのであろうか。両者の詩全般を眺めた場合には二人の生き方に聊か差異が認められるのである。農民の子として生れ妻子と共に暮らしていた在俗の時代(九九・一〇八・一五・二七)から村郷を出走して諸国放浪の末に寒山へ落ち着くに至った頃の詩に、未だ流俗を捨てがたくして「焉知松樹下 抱膝冷颼颼」(一七四)と歎じ、その後

も自嘲的な口吻で
○ 天生百尺樹 剪作長条木 可惜棟梁材 抛之在幽谷
年多心尚勁 日久皮漸禿 識者取將來 猶堪拄馬屋

と世俗への執着を洩らし、人煙を隔絶した寒山に留まりながらも、「心に執着をもたない、分を知った世俗の生活」に人生の幸福を夢みているのが寒山の姿であったが、そのような面影を我々は良寛に見出したいのである。禅に参じて後に僧となった^(大闡文仲の)良寛は長く苦しい修行の後にあくまでも古仏の跡を慕い一介の乞食僧として托鉢・教化のうちに生涯を終えた人である。その行乞実践の精神を『草堂集』上巻末尾の「請受食文」は端的に示している。彼此勘合するならば、良寛は既述の如き彼自身の生き方に関する信

念なり確信なりを表現するのにふさわしい思想表現を寒山詩に見出し我が意を得たりとばかり受容摂取した、というふうには理解するのが穏当な見方のようである。

三三 千雲万水間 中有一閑士 白日遊青山 夜歸巖下睡

倭爾過春秋 寂然無塵累 快哉何所依 靜若秋江水

の如き悟得の境涯を吐露した二連の寒山の詩境には良寛詩も及ばないけれど、その反面に於て寒山はあまりにも高踏的で人生を白眼視し孤高・独善に走り、ある意味では冷たく、人間的な温かさに欠ける嫌いがあることも否定できない。二人の生きた時代・風土、そして人間自体が異なる以上、詩風に差異の生ずることは当然であるが、如上の拙い比較を以てしても、良寛は寒山詩に学び、しかも寒山詩を乗り越えて独自の詩風を形成・展開させていることに気づくであろう。

良寛と寒山との漢詩をめぐる詩論・詩体・用語・表現手法・典故・内容等にわたる類似・影響関係を概観したが、紙幅の制約もあり最後の(Ⅱ)生き方に関する両者の比較は簡略にとどめざるを得なかった。いずれ別の機会に詳述することにし、ひとまず筆を擱く。

注

1 良寛詩の引用は東郷豊治氏編著『良寛全集』（以下、略して「全集」という）上巻「漢詩」の部に基ついて行ない、同書の各詩冒頭に附された算用数字の番号を以て示す。

2 寒山詩の引用は太田悌蔵氏訳註『寒山詩』（岩波文庫）に基づいて行ない、同書所収の各詩（拾得・豊干の詩を含む）に一連の通し番号（漢数字）を施し、その漢数字の番号を以て表示する。

3 枳清潭著『寒山詩新釈』附録三、岡田正之氏著『日本漢文学史』

（増訂版）附録参照。

4 例えは後述の如く、良寛詩416に対し寒山詩五一との一派の繋がり指摘しておいたが、寒山詩の代りに「古詩十九首」（其六）との結びつきを考えた方がよいかも知れない。つまり受容過程が寒山詩→良寛詩、文選→寒山詩→良寛詩ではなくて、文選→良寛詩の場合に該当するかも知れないのである。

5 入矢義高氏注『寒山』（中国詩人選集5）の解説二〇頁。

6 津田左右吉氏の「寒山詩と寒山拾得の説話」（同氏の全集第一九卷四八一頁以下）。

7 枳清潭は前掲書（注3）二二三頁に於てこれらの三言詩を一種変体の六言とするが今は岩波文庫本の分類に従う。

8 入矢氏の前掲書（注5）の語釈によれば頭肚、日頭、天公、財主、奴唇皮、一等、児家、農家、養（生の意）、形相、討便宜、当头、但自、可中、若為、浪自、亡命、論時、底（何の意）、雖然……却、等がその主な例である。

9 寒山詩二五〇番の第一句を意味する。以下これに同じ。

10 「六朝樂府、子夜讀曲等歌、語多双関借意、唐人謂之風人体、以本風俗之言也（以下略）」（『通俗編』識余、風人の項）。

11 注6の津田氏の論および木村英一氏「寒山詩について」（『日本中国学会報』第一三集）。

12 入矢義高氏の「寒山詩管窺」（『東方学報』京都・第二八冊）八七頁以下によれば、このような詠みぶりの詩は陶淵明をはじめ後漢・魏晉の頃の古詩や樂府に見られるわけであるが、ここでは語句の類似や詩意から推して寒山詩との結びつきを考えた。

13 注11の木村氏の論考六六頁。（梅花女子大学講師）